



Title	対話の場をひらく : 長崎県諫早市から
Author(s)	六郷, 颯志
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2026, 8, p. 174-180
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/103641
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

特集2 第16回臨床哲学フォーラム

テーマ：イタリアの精神保健と哲学実践

対話の場をひらく ― 長崎県諫早市から

六郷 颯志

はじめに

この原稿で何より行いたいのは、私自身が直接見聞きしたこと、誰かと共に語り合ったこと、あるいはそれを通して考えたことについて、書き留めておくということである。それぞれが苦悩を抱えながら、毎月皆で顔を合わせ語り合える場所を作り、守っていかうとしている人たちがいる。そのなかに私を迎え入れ、あたたかく接して下さった方々への感謝の念も込め、その活動について以下で紹介していきたい。

最初に自分の研究の主題を「精神障害と共にある生」に定め、さらに地域で行われる当事者中心の市民活動に的を絞ったとき、私は、そうした活動の独自性や意義について筋道を立てて論証する、といった趣旨の「研究計画」を提出した。今にしてみれば、ずいぶんと尊大な「計画」を用意したものだと思う。

一方で、内心では、すべては実際に人と会って話をしてみないと始まらないことだ、という思いもあった。そうして誰かと面と向かって話しをする中で見えてきたものを形にしていくことが、自分の役割ではないかとも考えていた。そこで、旧知の方々が地元で行っている「風まかせ」という名称の精神障害の当事者と家族の会合に毎月参加させて頂くようになったのである。

「風まかせ」の方々は、場当たりの要領を得ない私の話に好意的に耳を傾け、色々な話を聞かせてくれる。そして私自身、そうした時間を過ごすこと自体に一つの喜びを見出している。まずはそのことについて文字に起こしてみる、というのが、ひとまず今回設定した目標地点だ。おそらく、このエッセイに明確なオチはない。しかし、他方で「対話の場をひらく」とは、ある面では「オチ＝結論」を付けようのない問題について共に悩み、語る場所を確保し続けることを指すのではないのかと思われるのである。

「精神保健」について

誰もが持ちうる「心を病む」という経験を周囲が受け止めることができる、それに耐えうるコミュニティにしていくという発想は、「精神保健」という概念の具体的な実践を考える上で重要であると思う。イタリアにおける精神医療改革の動きのなかで、フランコ・バザーリアが赴任先のゴリツィア精神病院で始めた集会、「assemblea (アッセンブレア)」にも、どこかそんな想いが込められていたのかもしれない。

バザーリアが活動した時期から半世紀以上を経て、当時の精神病院での暮らしについて私が知る手段は文献などの資料に限られる。そこには、病を克服する医学の挑戦

と同時に、患者たちの苦悩の日々が存在したということ、間接的で断片的な形ではありつつもこれまで学んできた。

現代においても、精神科における臨床的な診断や治療は疾病のメカニズムを生理学的観点のみから理解し、投薬や外科手術によってそれに介入しようとする他科のものとは趣を異にしている。その特徴は体系的な診断基準に沿って「症状」と同定される特定の振る舞いや言動が重視されるという点であり、それらが止み、外から見て取れる病的な兆候がなくなるか減少した状態が治療の実質的ゴールとなる¹。

現在主流となっている〈地域移行〉の動きが活発になる前の精神科医療は長らく入院中心であり、その舞台であった閉鎖病棟が治療施設という性質に加えて社会の“問題人物”を隔離しておく場所という側面を持っていたことも今では広く知られている。そうした場所で自ずと問題化されていくのもまた個人の行動や言動であって、「医学」と「社会」の双方の観点から問題と見做されたそれは沈静や拘束によって排除されていった。

そんな中で始まったバザーリア主導の改革は、同時期に隆盛した「反精神医学」や社会学におけるラベリング理論といった、精神医学/医療それ自体を問題として取り上げ、その妥当性を問う運動とはまた異なる方向性を持っていた。あくまで私見として述べるなら、それは伝統的な精神医学への対抗言説である以上に、心を病む者が一人の市民として社会の中で暮らすという、ある種当然とも言えることを「精神保健 (salute mentale)」というアイデアを通して誠実に追求していった活動である。

「assemblea」の直訳は「集会・会合」だが、イタリア語の日常会話では学級のミーティングやマンションの住民会合などを指しても使われると聞く。あるいは、ゴリツィアにおける「アッセンブレア」は、それまで常に客体として扱われてきた患者たちを「住民」という形で意思決定の場に迎えることで、特殊な秩序とヒエラルキーが支配する病院という場所をなんとか一般社会に近づける意味合いを含んでいたのかもしれない。そして、病院の改革は最終的に社会制度の改革となり、イタリアでは公立精神病院が全廃される。

「精神保健」という言葉は、一般には各人における「心の健康」の増進や、それを目指す政策、制度といった意味で使われることが多い。一方で、「アッセンブレア」に始まり、後にイタリア全土で実践されていった地域ベースの「精神保健 (salute mentale)」には、個人における脆弱さや不安定さの除去ではなく、そうした不確実性を周りから支えることに力点を移すという意図的な発想の転回がある。

それを「安心して病める社会」などと表現すれば何やら胡散臭く感じられるが、それを実際にこの地上に築き上げるために求められた膨大な対価は想像に難くない。そして、それを担ったのは地域精神保健サービスに関わっていった全ての人々なのだ。

仮に、そうした国家規模のプロジェクトとしての「精神保健」の本質が、やはり自

¹ 例えば石原 (2018) は、精神医学が (脳を含む神経系を扱う) 神経学に完全に吸収されないのはなぜかという問いを設定しつつ、精神医学が他の医学分野における「局在論的・機能主義的」疾病観とは異なる観点で独自の疾病分類体系を構築してきた点を指摘している。

己の問題と付き合いながら一人の市民として暮らすという発想に帰着するならば、この先で紹介する「風まかせ」の活動もまた、「草の根の精神保健」と呼べるかもしれない。イタリアが経験したようなドラマティックな展開があったわけではないけれど、この国でも少なからぬ人たちの手で、小さな「安心して病める社会」が各地に築かれてきたのだから。

「風まかせ」

私は現在、長崎県諫早市で開かれている「風まかせ」という名の精神障害者と家族の会合に毎月出席している。「風まかせ」は元々、同市のとある一軒家で営まれていたコミュニティスペースで開かれる集まりの一つだった。諸事情でそのスペースを畳まざるを得なくなった時、定期的に集まり、話すことのできる場を残すことを望んだ人たちが、自ら公民館の会議室を借りて「風まかせ」として活動していくことになったのである。

実を言うと、私自身も中学時代に家族の不幸から調子を崩し、先のコミュニティスペースに「学習支援」という形でずっとお世話になっていた。私の母もそこでボランティアスタッフをしており、現在の「風まかせ」の主要メンバーと知り合ったのは十五年近く前ということになる。「風まかせ」の世話人兼代表のYさんには、既に大学院で学び始めてから一度、第8回臨床哲学フォーラムの登壇者を引き受けて頂く形でお世話になった。

「風まかせ」の世話人はYさんの他にはあと二人だが、お二人とも精神障害者のお子さんが出て、事実上Yさんが「当事者代表」、他のお二人が「家族代表」といった形になっている。日曜日の午後、参加者が集まるとまずは一人ずつ順番に自分の近況を報告する。その後はおおむね二つのグループに分かれて、誰かの悩みについて話したり、ある話題について互いに意見を出し合ったりしている。

前身が誰でも利用可能なコミュニティスペースということもあり、参加者の中には精神障害とは直接関わりを持ってこなかった人も多い。例えば、息子さんが長年外に出られず、親あるいは人として彼とどう向き合おうかと悩んでいるSさんは、うつ病を抱えながら実家暮らしを続けている人や、重い統合失調症の家族と生活している人の話にいつも熱心に耳を傾けている。

精神障害を持つ人は必然的に一人暮らしをするハードルが高くなり、場合によっては外出も難しくなるということは無論あるが、それにしても両者のやり取りは驚くほど自然に噛み合う。おそらく「風まかせ」に集まる人々を繋いでいるのは、何らかの属性ではなく「思い悩む」という人間的な経験なのだと思う。

「会話」か「対話」か

「風まかせ」の輪の中に入った当初の私の中には、今にして思えば少々的外れな一つの問いがあった。それは、「これは何らかの「対話」なのか、それとも仲間内での「会話」なのか」といったものである。学んでいる場所柄、念頭にあったのはやはり「哲学対話」のイメージだが、同時に、近年のオープンダイアログや当事者研究への注目の高まり

から、精神医療の文脈で「対話」や「対話的」といった表現が使われる機会が増えてきているということも頭の片隅で意識していた。

「対話」とは、日常語としては相手の考えや気持ちを理解しようとして言葉を交わすことを意味し、例えば「哲学対話」であれば、あるテーマについて参加者全員でじっくりと思考を擦り合わせ、時間を掛けて煮詰めていくものや、自分と他者の考え方の違いや共通点を「問答による探究」を通して知っていくといった教育的なものがある。あるいは、「対話的」な精神医療であれば、それは患者自身の経験やニーズに耳を傾ける、もしくはそれに依拠しながら行われる精神医療ということの意味するかもしれない。それでは、「風まかせ」の活動とは「対話」なのか。あるいは、そこに集まる人たちは「対話」を欲してここに来ているのか。とにかく、当時の私にはそうした疑問があり、かつその答えが出ないことに悶々としていた。

実際の「風まかせ」の様子を見てみると、ごく日常的な話題について皆でわいわい話すという場面もあれば、やや真剣な事柄について各々の経験から話し合うような場面もある。前者の場合はおそらく明確に「会話」（もしくは「おしゃべり」）の範疇だろうし、後者の場合、それは互いの経験から発する言葉を交換し、物事を共に見つめていこうとする「対話」であると言い得るだろう。

ミーティングへの参加を重ねていく内に、このような「会話」と「対話」は一方からもう一方へと滑らかに移動し、また戻ってくるといった柔軟なものなのだと感じるようになった。しかし、そのことの意味について少し踏み込んで考えられるようになったのは、もう少し後になってからだった。

これ以降では、「風まかせ」の活動の“芯”の部分に触れるエピソードとして、二人の方へのインタビューを通して伺った話について紹介してみたい。

Hさんと話したこと

Hさんの娘さんは、学生時代に調子を崩して以降、かなり長いあいだ口を開くことがなかった。夜中に突然家を出て行方が分からなくなった時もあったが、本人はその理由を言葉にはしてくれない。我が子が深い悩みの中にあり、目の前で苦悶していることは分かりきっているのに、その理由さえも分からなければ、当然それを近くで見守る家族もまた悩みに悩むだろう。娘さんとのコミュニケーションが困難だった数十年のあいだ、Hさんは町の家族会で中心となって精力的に活動したり、勉強を重ねてソーシャルワーカーの資格を取得したりと必死の努力を続けた。

しかし、Hさんは折に触れて、そうした親の努力は方向性自体が間違っていたところがあったのだと述懐される。本人との意思疎通が難しい以上、それはある面では必然なのだが、Hさんが試みたのは、我が子の抱えている「病気」がどのようなものなのかということについてより深く学び、理解するということだった（思えば、それは精神医学の歴史そのものにも通ずる話である）。

Hさんは、その時の自分は「病気」だけに目を凝らし、苦悩している娘さん自身に目を向けられずにいたと語る。そこに転機が訪れたきっかけの一つは、「風まかせ」の

前身のコミュニティスペースの集まりに参加するようになり、精神障害を持つ人から直接、じっくりと話を聞く時間を持つようになったことだった。

それまではどこか「病気」と娘さんを切り分け、前者に対処するという発想で考えていた面があった。しかし、目の前の相手から語られる主観的な経験としての精神障害について聞き、自身もまた話す経験を重ねる内に、「病気」の背後には悩みながら生きるその人自身がいるということ、娘さんもまたそうであるかもしれないということがより鮮明になっていった。いわば他者を通して間接的に、Hさんは娘さんと〈再会〉したのだ。

娘さん自身も、特にここ数年、作業所に通うようになってから自身の心境を積極的に口にするようになり、十年、二十年前に起きた出来事について突然「あの時はこう思っていた」と話してくれるようになった。今では「お互い喋りまくっている」とHさんは嬉しそうに語ってくれる。通常は個別に行われることが多い当事者の活動と家族の活動が、「風まかせ」で敢えて二本立てになっている理由には、こうしたエピソードも関わっている。

しかし、Hさんの話にはさらなる展開がある。実のところ、Hさんの娘さんが長い沈黙を経た後、外部との交流を持ち、変わり始めていたのは、Hさんが経験した先の「転機」よりもさらに前のことだった。

娘さんは、町の自治体を中心に行われていた精神障害を持つ人、その家族、およびボランティアからなる「心のリハビリ事業」に継続的に参加していた。Hさんがまだ悩みの渦中にいるとき、娘さんがある日唐突に「病気になってよかった。優しいボランティアさんたちに出会えたから」と言ったのだと言う。

それから数年後、Hさん自身もまた前述の新しい出会いを通して娘さんとの関わり方を変化させていった。その経験は現在の「風まかせ」の中に、活動形式やHさん自身の語る言葉を通じて生かされている。一方で、Hさんの娘さんが「風まかせ」に出席されるということは基本的にはない。二人があくまで別々の場所で、それぞれに築いた他者との関わりを通して再び出会うとは、なんとも不思議で魅力的な話ではないだろうか。

Yさんと話したこと

特に親しいYさんと話す時でも、最初のほうは尋ねたいことを一応前もって考え、インタビューという形で録音もしていた。それはそれで意味のあることだったのは間違いないが、その頃に二人で話した内容は、今の活動に至るまでの経緯など、事実関係の確認も含めた固い話題が中心だった。しかし、二回、三回と続けていくと、良い意味で緊張感が抜けてくる。そして、話をする場所を公民館のフリースペースから共通の知人宅に移した時、会話の質と雰囲気が決定的に変わったという感覚を覚えた。

その日は私が先に着いてYさんを待っていたのだが、Yさんは到着するなり「まずは一番大事なところから話そうと思って…」と話を切り出し、過去に一度、途中まで受講していた電話相談窓口の相談員の研修を再開したと教えてくれた。そして、生と死のあいだで逡巡するような「ステージ」は自分自身の「原点」だから、と付け加えた。

「原点」というのは、そのひとつ前のインタビューで話したことに関連している。「風まかせ」がYさんにとってどういう場所なのか、という点について二人で話していて、その時は明確な答えが出なかったのだ。Yさんは前に顔を合わせてからずっとそのことを気にかけてくれていて、今日ここに来て最初に、自分の達した結論を伝えてくれたのだと気づいた。レコーダーの録音ボタンを押す間もなく重要な話に入ってしまったので、今日はそのまま話し続けようということになった。

Yさんの見解のあらましはこうだ。「風まかせ」の会合では、様々なものごとを「どうするのか」という視点で考え、皆で話し合う。それは、先の「原点」よりも一つ上の「ステージ」のなかで、「生活」という前提に立ってものを考えるということではないか。一方、Yさんの思考はいつでも「生活」の自明性そのものが曖昧になるような地点から出発する。その意味では、本当に自分に向いているのは、同じくそうした場所から葛藤している人と一対一で向き合うことなのかもしれない。

これはある意味で「風まかせ」が抱える一つの課題と言えるのかもしれない。確かに、端的に言えば己の存在に関わるようなズシリと重い問いに向き合う時間は、Yさんにとっても私にとっても重要なものだ。だが、それは多くの場合、プライベートな空間で、一人かごく少数の親しい者としか成し得ないだろう。「風まかせ」でそれをやるには、とにかくもっともっと話す時間が要る。増して会の運営にも気を配るYさんの立場では、ディープな話を切り出すハードルは高くなって当然だ。

ところが、そうして二人で神妙に語り合っている内に、話はまた異なる方向へと展開した。確かに、人は時に自分自身のなかに囚われ、家族との会話さえ億劫な状態になることがある。でも、今日は少し元気があるから、何かの集まりに出かけようかと思う日もまたあるのではないだろうか。前者の場合は、もしかすると受話器越しの話し相手が救いになるかもしれない。でも、後者の場合に足を運ぶことのできる場所があるという感覚にも、きっと同じくらいの価値があるはずだ。

「風まかせ」は雑談混じりの「会話」に始まり、それに終始することもあれば真剣な「対話」に移っていくこともある。顔馴染みと会って会話を楽しむ。お互いの苦労は知っているから、往々にしてそれは真面目な「どうしたら良いだろう」という話し合いになる。もちろん、調子が良くない日は家にも構わない。

Yさんと私の「対話」も、コアな部分から徐々に話を移していく内にムードが変わり、結局は本来の趣旨と関係のないことを熱く語る「雑談」になってしまった。ちなみにいちばん盛り上がった話題は、「なぜYさんはゴーヤをチャンプルーではなく味噌炒めで食べるのか」だ。「生活」の自明性が問われる場所から出発した「対話」が、最後は料理についての「会話」で終わるといえるのは、なかなか奥深いものがある。

悩みながら日々を生きる中でもそこには緊張と弛緩の満ち引きがあり、それに合わせて、どこで、誰と、どのように過ごしたいのかは変化していく。「風まかせ」の活動とは、そうした「悩み多き生活」の一部を引き受け、支えていこうとする営みでもあると言えそうだ。

おわりに

ここまで、私が足を運んでいる「風まかせ」の活動と、そこで体験したエピソードについて紹介してきた。とは言え、冒頭で述べたようにこのエッセイに明確なオチはない。それぞれの節で述べた内容も、繋がっている部分があればそうでない部分もある。総括的なことを述べるには私にはまだまだ学びが必要であるし、なにより本稿のなかで紹介した出来事の意味を最終的に判断するのは、私に話をして下さった方々自身であるべきだ。だから、ここではあくまで私自身の視点から、そうした対話の場をひらく活動を文字に書き留めること以外はしないように心がけた。

最後に、前半部分で触れた「草の根の精神保健」という話題について、あと少し話を展開してから筆を置く。イタリアの改革において目指されたのは、人が悩みを抱えつつも一市民として暮らしていくことであったと述べた。しかしこの点については、そこには法的な権利保障や住居等の生活基盤の提供も含めた、積極的な行為としての「市民生活の構築」というニュアンスがあるということを付言しておきたい²。

本稿で綴った「風まかせ」の活動もまた「市民活動」として行われている。しかし、ここで言う「市民」とは、端的に言えば「私人」の類義語としてのそれに過ぎない。法的な扱いとしては社会人サークルなどと変わらず、もちろん補助金の類もない。しかし、私はむしろこの点が重要であると考えている。

まず断っておく必要があるのは、公的な制度の必要性を否定する気は毛頭ないということだ。「風まかせ」に参加する人たちも、もちろん各種の医療福祉制度を利用するし、そもそも会合の開催場所は市営の公民館である。そうではなく、それなりの規模で展開される公的サービスや法人による事業の穴を埋めるように小さな活動が存在し、それを通して自身の生活を形作っている人たちがいるということが重要なのである。

大きな取り組みとしての「精神保健」とはいわば真逆の方向から、「草の根の精神保健」は精神障害を持つ人の市井での暮らしの支えとなっている。この点について最後に記し、この原稿の結びとしたい。

参考文献

石原孝二, 河野哲也, 向谷地生良編『シリーズ精神医学の哲学3 精神医学と当事者』東京大学出版会, 2016.

石原孝二『精神障害を哲学する 分類から対話へ』東京大学出版会, 2018.

小俣和一郎『精神医学の近現代史——歴史の潮流を読み解く』誠信書房, 2020.

松嶋健『プシコ ナウティカ イタリア精神医療の人類学』世界思想社, 2014.

「語り場」風まかせ」ウェブサイト (25/10/3アクセス)

<https://sites.google.com/view/katariba-kazemakase?usp=sharing>

(ろくごう・そうし)

² 松嶋 (2014) は、イタリアの精神医療改革を「主体性の返還」として論じるP.A.ロヴァッティにおいて、返還された「主体性」が「市民権」とほぼ同一視されていることを指摘している。